

バングラデシュはいま(下)

モノ心ともさらなる援助を

1977年—連合赤軍にハイジャックされた日航機の乗客が日本に服役中の過激派メンバーと引き替えに釈放された。

いわゆる日航機ハイジャック事件で、その舞台となったのがダッカ国際空港である。多大な迷惑を掛けた日本はバングラデシュに対し謝礼の意を申し出たが同国は固辞した。その高尚で寛大な国民性が30年経った今も私の心に焼きついている。

今のバングラデシュはどうか。限られた人たちとの接触ではあったがバングラデシュ人はよくしゃべり底抜けに明るく、そして何よりも義理堅くて私が温めてきた国に対する思いが裏切られることはなかった。

時論

元岡山県議会議員

日南 香



詩聖タゴールが「黄金の国ベンガル」と賞賛したが私が駆け足で訪ねたラガチャー村、テングチャー村など、取り巻く自然環境は類いまれで一幅の絵を鑑賞する心地であった。

岡倉天心が伝えた日本美の思想は今も息づいており日本に対する信頼も厚く国交樹立40年を間近にモノ、心ともに援助の手を差し伸べるべく、その喫緊性を強く感じた。

ガバナンスが国の発展阻害

私がこの国を初訪問して痛切に感じたことはインフラの整備が極端に悪いことである。とりわけ交通渋滞は慢性的で1時間で行ける距離が4

時間もかかってしまう。これでは進出を目指す海外の企業も二の足を踏むだろう。交通網の未整備が後進国からの脱皮を著しく阻害していると思う。

夢ではない 明るい未来

そしてもう一つバングラデシュの発展を拒んでいる最大の要因がある。それは気候的要因よりもガバナンスだ。法と秩序はいまだ未熟で幼稚であり、汚職の横行は日常茶飯事で国民生活の向上に「待つ

た」を掛けているというのである。総選挙ごとに政権が変わり政治が安定しない——どこの国に似た光景である。市民の社会参加、政治参加をどのようにして高めていくか等々、課題は多い。「今の政治システムにも申すにはバリアが多く危険」と顔をしかめたアムダバングラデシュのラザック氏の辛い表情が忘れられない。資本主義社会でありながら国の名称が人民共和国という矛盾が見え隠れするのである。

行のナース佐々木博子さんに、営業用に岡山に1台持ち帰ろうか、と軽口をたたいた。ほどだが、今や完全に市民の足になっている。自転車漕ぐ若者のバイタルティは旺盛で、この国の明るい未来を垣間見る思いでもあった。肥沃な大地と豊富な天然ガスを持つバングラデシュはいま民間主導の経済発展がわずかながら進みつつあるといわれ国民の「自立」という意識改革が芽生えれば近い将来、豊かな国への変貌も決して夢ではない。

◇

明るい未来感じる活力

虫除けの蚊帳の中で寝た。近い日この国をまた訪ねてみたい、と。初めてで最後の国と思いついた。国をまた訪ねるのか。古い懐かしい思い出をかきながら私は思い願った。



底抜けに明るく、そして義理堅いバングラデシュの人々